

戦争の記憶をたどる旅 ——タイ南部の県で考えたこと

田中寛

東南アジアのタイはいま、アセアン諸国のなかで独自の発展を遂げている。このたび、私は短期間であったが、久しぶりにタイを訪問した。タイの一月は一年でも比較的凌ぎやすい時期である。厳寒の日本から6時間で熱帯のタイに到着すると、毛穴から汗が一気に噴き出てきた。この暑さは青春期を過ぎた四十年前と少しも変わらない。訪問の目的は日本政府と民間の支援により、帰国留学生・研修生のタイ人が中心となって技術移転、産業人材育成を目的に一九七〇年代に設立された泰日経済技術振興協会の設立五〇周年記念式典への出席であったが、合間を縫って過去の記憶をたどる旅に出かけた。といっても時間も場所も限られている。駆け足であったが、小文ではいくつかの体験を綴ってみたい。

南部の県、プラチュアップキーリーカンはマレー半島にのびるタイでもっとも細くなった地形の県であるが、ここに太平洋戦争勃発時に日本軍が上陸したことはほとんどの日本人の記憶にないことである。私が当地を最初に訪れたのは四十年も前のことだが、タイ人に連れられて行って説明を聴いてはじめて知ったことであった。それ以来、私は国内に残存する戦争遺跡を訪ね続けた。今回の訪問はかぞえて六回目。前回は二〇一一年の三月で東日本大震災による福島第一原発事故を知ったのもこの地に滞在していたときであった。

バンコク南バスターミナルのピンクラオからロットトゥー（白いワゴンのミニバス①）で約四時間半、左手にタイ湾が広がる海岸に到着する。ミニバスは地方への旅客運輸の重要手段だ。バラマー・グループという運遊会社が運営している。運転手の他に十名乗ることが出来る。片道二二〇バーツ、日本円に換算して八百円ほどだ。三百キロも移動するのにこの金額なのである。これで採算がたつのだろうか。安くて気の毒なくらいだった。

①

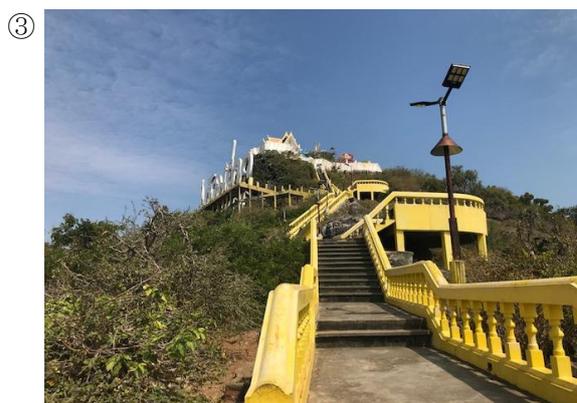


②



バスの発着所“ターロットトゥー”で軽く食事をとり、海岸に向かって二キロほど歩く。入口に県庁所在地の豪華な標識②をくぐった。これもタイの地方にある光景である。

到着するや、まず三九六段もの石段が続く景勝地、カオチョンクラジョク（ガラスの穴の山）③を目指した。別名「鏡山」である。餌代と杖を勧める女性たちがいた。50 バーツだという。日本円にして二百円程度。トウモロコシとバナナはすぐに猿の大群に分捕られてしまった。杖は下山した後で返却することになっている。息をつきながらようやくたどり着いた頂上からの眺望は絶景である④。三つの湾をのぞむ町だ。左手にはノーイ湾、正面にプラチュアップ湾、右手にマナオ湾を前に第五航空団基地があり、ときおり飛行機が滑走路に飛来するが、敷地内は広大な庭園になっており、高級リゾートが開発されている。



当日は時間が過ぎていたので翌日の見学にすることにし、初日は市内見物にあてた。市内の細い道路を歩いていくと右手に賑やかな「祠」が見えた⑤。市内で日本料理店を営むHさんによれば、日本軍が上陸した後に司令部が置かれていた場所だそうで、今は日本軍とタイ軍が左右にならんで敬礼をして人形があり、なんともほほえましい。また、その近くには日本人の和服姿と軍服姿の観光用撮影スポットがあり目を引いた⑥。タイに詳しい人ならすぐにわかるだろう。日本人将校のコボリとタイ人女性アンスマリンの悲恋を描いた『メナムの残照』（タイ語では {クーカム}、運命の人）である。何度もリニューアルされ、タイ人で知らない人はまずいない。だが、二人の悲恋の場所はバンコクである。これも観光誘致の演出であろうか。当地の人たちの心情はどのようなものだろう。また数十メートル歩くと空軍基地の塀にぶつかるが、その角の民家の塀には一面に絵が描かれていた。日本軍とタイ軍が交戦する場面で、中央に白い鳩が描かれている。地元のアーティストが描いたのだろう⑦。



⑦



⑦



翌日、開館の時間を待って航空団敷地内に入ろうとしたが、係官に制止された。以前は歩いて入れた気がしたが、現在は車でなければ自由に歩いて入ることが出来ない。折よくやって来たオートバイの横にサイドカーのように座席を設けた「タクシー」を呼び止め、首尾よく敷地内に入ることができた。以前なら数分で到着したのが、迂回してやっとたどり着くことができた。敷地内には当時のタイ空軍の軍用機（いずれも複葉機）の現物が三機展示されている。何ととっても目を引くのは盛り上がった土の上に築かれた石碑である。案内板にはタイ語と英語と日本語の説明がある。日本語には「石浮き彫り絵。この第5航空団歴史庭園における石浮き彫り絵は、仏歴（ママ）84年12月8日の英雄の夕刊な行為を思い出すために、60トンの緑砂岩を用いて作られたものである⑧。表の絵には、日本軍による上陸との対戦を表す。裏の絵には、停戦条約の締結を表す」とある。タイ語には日本軍という文言が見あたらないのはなぜだろう。そして、そこから少し離れた場所にタイ軍兵士が国旗を掲げ持った記念碑が立っている⑨。少年義勇兵である。戦死した兵士三十九名が記されている。少年義勇兵といえば、2000年に公開されたユッタナー・ムクダーサニット監督の『少年義勇兵』を思い出す。映画は隣県チュムポンが舞台で日本軍と戦う少年義勇兵の物語だ。

⑧



⑨



戦争記念館は二か所あり、一つは展示室で当時の写真が展示されている。また映写室では7分間にわたる当時の戦闘を紹介したフィルムが上映されている。戦闘に至った経緯、殉死した兵士の詳細な紹介である。もう一箇所の施設はなぜか閉鎖されていた⑩。

日本軍が上陸したマナオ湾の渚を歩いた。当時の戦闘の様子を想像した⑪。

⑩



⑪



椰子湾は波濤がたかく、潮風に煽られながら渚を歩いた。それから私はレンタサイクルを借りて、もうひとつの湾、ノイ湾を目指した。昨日、Hさんに薦められた場所である。小一時間で到着すると、またきつい石段を登った。名利“ワット・アーオノイ”（正式名は“ワット・タムカオカンクラダイ”という長い名称）⑫。辿りついた岩山の奥には黄金の大きな寝仏が安置されていた⑬。この山頂の洞窟までどうやって運んだのだろうか。さすがにここまでは旅行者はいないだろうと思っていたら、西洋人が数人歩いたり海岸で甲羅干しをしていたりと長閑な光景である。プーケットやサムイ島といった有名なりゾートよりはこちらの方が鄙びたタイらしさがあるのだろう。私もしばらく滞在してみたくなった。

⑫



⑬



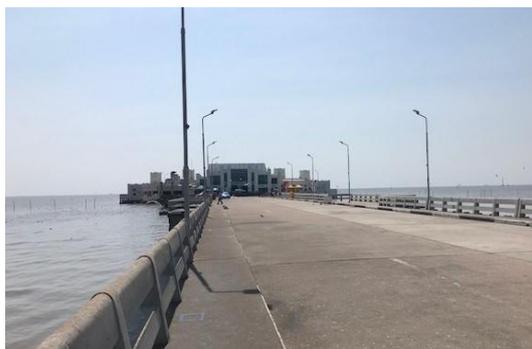
再びバンコクに戻り、今度は“バンブー”という海軍の避暑地であるバンコク郊外に足をのばした。この場所も太平洋戦争勃発時に日本軍が上陸した場所の一つ。敷地内は無料だが、栈橋⑭につづく正門の入り口には史実を記した石碑があった。

最後に訪れたのは、王宮前広場近くの船着き場「ターチャー」(象港)から歩いてすぐの場所にある、かつてのバンコク日本語学校跡地である⑮。バルコニーといい全体のたたずまいといい、当時の面影を十分残している。以前は中華系の銀行だったと記憶するが、現在

は一階がコンビニ兼喫茶室、二階は自由に休憩できるスペースとなっている。確か当時は一階が事務室と図書室、二階が教室にあてられていたはずだ。窓際のテーブルに腰をおろし窓外を眺めると、観光バスの群れが飛び込んできた。日本では東京日比谷の官庁街を想わせる一等地である。当時、日本語学校、そして日本文化会館の運営にあっていた先達は戦時期にあって何を考えていたのだろうか。ふとタイムスリップしたような感傷的な気分にもなった。

(大東文化大学名誉教授・言語学)

⑭



⑮

